

奈良県における渡来系文物の基礎調査

The Excavations of the Torai-kei-potteries of the Kofun Period in Nara Prefecture

植野 浩三*

Koso Ueno

はじめに

近年、全国各地で渡来系文物が確認されている。特に韓式系土器は、5世紀代を中心として多量に検出されており、この時代を特色づける渡来文化の一つとして位置づけられている。

本研究助成は、奈良県下の渡来系土器、なかでも韓式系土器を集成し、時代的、空間（分布）的傾向を整理し、奈良県の動向について検討したものである。将来的には、近隣地域と比較して、歴史的な動向や関連性について考察することを課題としている。

I. 奈良県下における韓式系土器出土遺跡の傾向

本研究では、まず遺物・遺跡の集成を行い、50遺跡をまとめることが出来た。出土遺物は遺跡によって内容に格差があるが、主要な出土地域は現在の行政区でいえば、天理市、橿原市、そして御所市の三地域である。その密集地域の遺跡群は次の通りである。ここでは陶質土器出土遺跡も含めている。

天理地域：布留遺跡、和邇・森本遺跡、星塚1・2号墳、小路遺跡、中町西遺跡

橿原地域：曾我遺跡、四条大田中遺跡、新堂遺跡、曲川古墳、下明寺遺跡、高所寺池遺跡、四分遺跡、南山4号墳、新沢千塚古墳群、藤原京跡下層遺跡

御所地域：室宮山古墳、葛城石光山古墳群、佐田遺跡、南郷大東遺跡、下茶屋カマ田遺跡、佐田（袖ノ木）遺跡、下茶屋地蔵谷遺跡、下茶屋迎田遺跡、南郷千部遺跡、檜原遺跡

その他には、さほど密集度はなく、やや単発的な様相を呈する遺跡として、奈良市平城京左京六条三坊、東紀寺遺跡、生駒市宍分宮ノ前遺跡、宍分西畑遺跡、大和郡山市八条遺跡、原田遺跡、田原本町十六面・葉王寺遺跡、多遺跡、三宅町伴堂東遺跡、桜井市脇本遺跡、大福遺跡、明日香村山田道遺跡があり、その他にも香芝市、葛城市、大和高田市、五條市内の遺跡においても出土が確認されている。こうした遺跡は、奈良盆地の中西部域および南部域にかけて分布

が濃厚といえる。

Ⅱ. 韓式系土器の状況

各遺跡の出土遺物は、必ずしも一定ではない。出土遺物の量や種類は、当然ながら遺跡の性格や調査の制約にも関係している。比較的まとまって韓式系土器を出土した遺跡は、天理市中町西遺跡である。多量ではないが、軟質系土器の甕、甗、鍋、平底鉢が出土しており、本来の様式を備えている。こうした状況は、布留遺跡や壱分宮ノ前遺跡でも窺え、一定の様式を具備している。また、御所市南郷遺跡群は広域に亘っているため、当然のことながら韓式系土器の出土も充実している。甗、壺、甕、鍋、平底鉢の全ての軟質土器の形態を備えている。

その他の遺跡においても、こうした状況は推定可能であるが、現状では数量的な格差がある。現状におけるこうした差は、所謂、渡来人の存在密度を反映している可能性もある。

出土遺物の時期は、相伴している須恵器・土師器によりおおよそ比定できる。須恵器出現以前の遺物も若干存在するが、ほとんどがTG232型式～TK208型式のものであり、TK23型式およびそれ以降のものも若干存在する。出土状況では厳密な時期の限定は出来ないが、TG232型式～TK208型式の間に、軟質系土器の存在が顕著である。

Ⅲ. 韓式系土器出土遺跡の動向

前記した韓式系土器出土の密集地域（天理地域、橿原地域、御所地域）と、出土資料の充実度はおおむね一致している。橿原地域は多少希薄であるが、ほぼ同様な状況が復元出来ると考えている。こうした密集地域は、安定した渡来人の痕跡として理解できよう。また、微量な韓式系土器を有する遺跡は、僅かな痕跡としてひとまず認識される。

このうち御所地域は、古代葛城氏の本貫地であり、葛城氏の政治的活動との関わりにおいて渡来人の移入が存在したことは、多くの研究者の一致した意見である。遺跡の状況も、大和内で最も充実しており、他を凌駕している。また、天理地域は物部氏の本貫地として伝えられる地域である。韓式系土器の出土量は、南郷遺跡群に比べると少量と言わざるを得ないが、まとまって出土している点は、御所地域の縮小版的なあり方を呈している。橿原地域は、大阪平野から入ってくる交通の要衝地であり、奈良盆地の東西南北の交叉路にも当たる。遺跡と遺物の密集地域は、こうした重要性を内示している。

おわりに

奈良県における5世紀代の韓式系土器の分布は、大きく3つの密集地域があった。この地域は歴史的にも重要な場所であり、古代豪族の政治的活動において、渡来人との関わりは重要な要素であったことを裏付けている。